

野良生治『碓ヶ関物語 日常[1961]と歴史』 北方新社 2022.7

野良生治の小説『碓ヶ関物語』に感応し

瀬川紀雄

詩集六冊上梓している野良さんの、『津軽鬼面舞』(2019)に続く第二小説。

五部構成で、まずⅠは序として、野良さんの生まれ育った旧碓ヶ関村の歴史を概観する。歴史的なエポックとして、かつての阿闍羅山のカルデラ湖、縄文前期の遺跡、鎌倉時代における古懸の不動妙の移転、津軽為信の関所、十九世紀初めに京都からの陶工が始めた久吉焼、イザベラバードの村の印象、碓ヶ関から秋田への鉄道の開通、県立公園となった温泉街、三笠山に建立された葛西善蔵の文学碑などに触れている。

Ⅱ「春」から物語が始まる。主人公の佐藤雅史は碓ヶ関村白沢に昭和二十四年に生まれる。家の隣に池があり、池の向こうに大山祇神社があって近くを奥羽本線が走っている。

昭和三十六年に雅史は小学六年生になった。学校で週番活動を行う。担任の先生や友達、国道沿いの店々、床屋、温泉、医院、旅館などを描写。そして弘前城の観桜会や角はデパート、春の遠足や浅虫への修学旅行など、当時の状況が実に細かに描かれている。一方、家の手伝いとし

て農作業や山菜取りの描写も実に詳しい。林檎の人工授粉や実すぐり、袋かけ、薬剤散布、タケノコ採り、田植え、山羊の飼育と具体的である。この辺も作者の実体験があつてのことであり、事実、生年は二年異なるが雅史とは作者のことであろう。

小生、野良さんとは高校の同期であり、平川のずっと下流の岩館という集落の生まれ育ちだが、ちよつとクラスの副学級長も行い、同じ電車での弘前城の観桜会や角はデパート行き、隣の旧石川町の床屋や医院、銭湯、浅虫や椿山への家族旅行、林檎畑も少しある稲作農家であり、山羊ではなく豚や兎だったが、実に重なることが多い。ただ、山菜採りは未経験だった。山が好きな父がそれこそ碓ヶ関村へタケノコ採りに出かけ、その日の夕餉のタケノコの美味しかったことは今でも忘れない。

Ⅲ「夏」も同様に運動会、宵宮祭り、他校との委員会、夏休みの川遊び、臨海学校、村の冠婚葬祭、盆踊りなど季節的な種々のテーマのもとに描かれている。この季節もやはり一番に遊びの描写が楽しく、自分のことのように思い出される。土ゼミ獲りや将棋の「じえんこ取り」、「なのかび」の芋煮会、秘密の隠れ家づくりなど。それだけに村内の水害や火事の事件には同情させられてしまう。

火事や水害は小生の村でもあった。川は同じ平川である。村の土手の決壊を思い出す。残念ながら臨海学校はなかった。

兄・康久が登場するが、もしかしたら昭和二十四年に生まれというのは、兄を設定しているのだろうか。林檎作業の手伝いの中で、袋掛けを

兄と競争する描写があり、一日に千五百枚ほど掛けるといふのはびっくりした。小生の場合は二歳上の兄と田んぼの除草機や脱穀時の稲束を何束何回運ぶかが協奏だった。その他、父が山から捕ってきたマムシを蒲焼にして食べたことに驚く。村の親戚でもあったように思う。

Ⅲ「秋」では毎年林檎箱を三十箱ほど組み立てたことに驚く。稲刈りでの棒掛けへの稲束運び、イナゴ獲りと食、青函連絡船「羊蹄丸」での函館への修学旅行、父が採ってきたキノコ料理、林檎もぎ作業、テレビの購入と相撲観戦、子どもたちに人気があった俳優（中村錦之助、大川橋蔵、片岡千恵蔵、長谷川一夫など）の写真付きカード、学芸祭など。

最後のⅣ「冬」では藁の利用の仕方、薪ストーブと熾き、二期の終業式、ジャンプで四位になった校内スキー大会、手作りの櫓、母の編み物、餅つきと餅の種類、年末年始の料理、古懸の獅子舞、双六や凧など子どもの正月遊び、三学期の付属中学入試に向けての補習、屋根の雪下ろし、雪で作ったかまくらや土俵遊び、かんじきを履いての林檎の剪定作業手伝いと皮はぎ、山で切った木を櫓で運ぶ作業。

小生はスキーがなく、苗代での長靴の底に付けるスケートだった。受験勉強の経験もない。かんじきでの剪定や山の木運びにはびっくり。

そして卒業式と就職で上京する友達。以下の部分はこの小説内の白眉であろうか。

「三月下旬、中学校を卒業して首都圏に就職が決まった生徒が夜行列車で上京していった。町内の知り合いの生徒が上京するときは、神社の下線路沿いで見送った。近所や親戚の人が三十人ほど、見送りに集

まった。

見送られる生徒は、列車のデッキから、見送りの子どもたちのために、お菓子をいっぱいばらまいて、旅立っていった。雅史はその景色を遠くから、そつと見つめていた。」

クラスメイトの遊び仲間が、一家でブラジルに移住するというニュースに驚く。次の日、碇ヶ関駅を発発するというので、クラス全員で見送りにいく。

家の種々の野良仕事を手伝うのはこの時代の少年たちの常のことであつたろう。その上での雅史は学校で週番当番。「朝は玄関で登校指導をし、授業が始まる前、先生方が打ち合わせをしている時間は、一年生の学習の面倒をみていた。集会があつて児童が講堂へ移動する時は、整列指導をし、放課後は清掃活動の点検も行った」。さらに児童会副会長をこなし、南津軽地域の小学校の交流会や協議会などで意見発表を行っている。また、父は民謡が好きで、よく林檎畑で仕事をしながら津軽民謡などを聴いていたから自然と雅史も歌を覚え、学校でも雅史は歌をせがまれていた。運動会では道具係であつたが、一番忙しく体を使う係だつたろうか。担任も自慢できるよき生徒であつたことだろう。野良さんは生物の先生であり、高校長で退職されている方だった。

「朝、小学校へ行く前に、山羊を近くの草地に連れて行き、電柱柱にロープを結んで放し、夕方に山羊小屋まで連れて帰るのが、雅文の毎日の仕事だった」

歴史的な意義を持つ言葉もよく用い、きちんと調べた上でのことが了解され、しばしば生きた津軽弁もカッコ付けで上手く用いている。例えば、もんぺの上にめんだり（前垂）、田んぼの「めなぐち」（水口）、列車の最後尾に行商のおばさんたちである「しよいこ」（背負子）、「まが」（マクワウリ）など。特に、家を継ぐ長男は「あんさま」（兄様）で、家を出る次男は名家の次男は「おんちやま」なのに対し一般では「おんず」（弟子児）「やずめ」（奴め）、しかも「かす」を付けて「おんずかす」「やずめかす」で笑ってしまった。私は「やずめかす」だった。末っ子は「よでっこ」（余手児）。

「豚を飼っていた家では、餌のように「はめ」（残飯）を、各家庭を回って集めていた。「げす」（人糞）も桶に入れて畑に運び、野菜の肥料として使った」

そんな中、時に著者自らの人生観を挿入している。例えば次のような文章がある。

「他の津軽民謡は、生きる厳しさがどこかに感じられるのにドダレバチは「ホーイホーイ」と開き直って生きていくという強さがあつた。苦勞を乗り越えてきた老人たちによく似合っていた。」

この小説は、概して物語の進行に歴史的事実を措定しながら自らの過去の体験を重ね、淡々と述懐しているといえようか。そして、教養小説の一断面を切り取った作品にも思える。歴史的背景も感じさせなが

ら、一断面を季節ごとに幅広く取り上げており、それも作者の実体験からで概してあるだけに説得力をもつ。感情に訴えることを主眼とする感傷文学とは異なり、村外の歴史と地域の歴史を含む日常の両面からなっているためリアルティが増し広く読者のこころに染み入るといつて過言でないだろう。歴史と小説という内的なものとの構成による小説。新しい方法かもしれないその構成方法にも感嘆する。小説というものの存在価値を堂々と告げているようにも思われる。

親類が集まつの田植えとみんなでの赤飯の和やかさ、村中の町対抗での野球大会など、昔の人たちの何らかの行事での親睦にいまさらに熱いものを覚えた。なんという地域住民の絆の深さであろう。もう核家族どころか二世帯の今の時代。もはや長寿にもよるかもしれない一人世帯に加えて、離婚者が多い上に未婚者の増加時代。昔の家族構成に戻らなければならぬと祈るのは多くの人たちの願いかもしれない。自分の少年時代を思い出させてくれてありがとう！ という気持ち

瀬川紀雄HP [〈シエカの風〉](#)「読書」内

2022.8.19